

19-20世紀東アジアにおけるキリスト教出版の諸関係と動向

—— 韓国プロテスタント教会の出版を中心に ——

洪 承 杓

はじめに

東アジアにおけるプロテスタント宣教は、「中国 → 日本 → 韓国」の順に展開された。また、西欧キリスト教の受容は、欧米の近代化から生まれ出た文明、技術、そして媒体の受容につながられていった。特に「出版」と「印刷」という近代西欧の文化的資産は、東アジア三国におけるプロテスタント宣教において最も重要であり、決定的な役割を果たした。本発表文は、東アジアにおける19世紀末から20世紀初までのプロテスタント宣教の過程に現われたキリスト教出版の流れと性格、相互関係を考察することで日・中・韓三国におけるキリスト教出版の関係史を究明するものである。ただ、筆者が韓国人であるという点と資料のアプローチの限界によって主に中国と日本のキリスト教出版が韓国のキリスト教出版に及ぼした影響を中心に考察する。

1. 東アジアにおける聖書翻訳過程と近代アジア出版の性格

日本が明治維新(1864)による近代化を成し遂げながら、近代印刷及び出版の導入は中国と比べて遅れていた。その理由は、中国の聖書翻訳及び活版印刷技術の導入が日本よりもずっと早くになされたためである。

ギュツラフ(Gützlaff, Karl Friedrich August)が初めて『約翰福音之伝』(ヨハネによる福音書、1843)を日本語で編纂した時も、1823年にモリソン(Robert Morison)がミルン(William Milne)と協力して刊行した『神天聖書』を参考にして翻訳した。² 日本初代の長老派宣教師であるヘボンも『和英辞典』の印刷及び出版の過程において、当時中国の上海まで行って書物を製作しなければならなかつ

¹ 本稿では、韓国でプロテスタント宣教が開始された19世紀末から韓国に対する日本の植民地支配が終わる1945年以前までの時期における、日・中・韓のキリスト教出版の相互関係を考察する。

² 岡部一興、「聖書和訳とヘボン」、韓国キリスト教歴史研究所編、『李樹廷の聖書翻訳と宣教活動』、マルコによる福音書出版130周年記念国際学術シンポジウム(資料集)、2015年6月30日、東京在日韓国YMCA、29。

た。³ その結果、1867年5月に日本で最初の『和英辞典』である『和英語林集成』が出版された。ヘボン、聖書を翻訳する際に参考にした中国語(漢語)聖書に対して次のように高く評価している。

日本語でどの程度の仕事ができるかを試すためにマルコ伝を日本語に翻訳することを始めました。この翻訳をしてみて、中国における宣教師たちが訳したすばらしい漢訳聖書によって多くの助けを得ることができました。実にこれは大いなる助力でありました。それは日本語の聖書の基礎となっているのです。⁴

ヘボンは、聖書翻訳以外にキリスト教出版にも関心を傾け、中国の宣教師マッカーティー(D. B. McCartee)が著した『真理易知』(1866)、十戒や主の祈り、使徒信条など三つの核心的な教理を分かりやすく整理した『三要文』(1872)などを出版したが、すべてが中国で蓄積された近代出版技術と中国語聖書及びキリスト教教理書を参考にした成果である。⁵ その後、日本である程度近代活版技術が定着して行くと、李樹廷の韓国語聖書(1884-85)も日本の横浜で出版されることとなった。李樹廷の韓国語聖書を日本で受け取り、来韓したアペンゼラーとアンダーウッドなど、最初の韓国のプロテスタント宣教師は、以後聖書及びキリスト教出版物を製作するために横浜まで頻繁に出向いた。アンダーウッドが初期に発行した『鮮英文法』(1889)や『韓英字典』(1890)などもすべて横浜で出刊されたが、これは、ヘボンが最初の英和、和英辞典を印刷するために中国上海を訪問したことと類似する。

2. 近代中国キリスト教出版界の影響力

1) 中国における出版事例の踏襲

キリスト教出版物の中で、聖書の次に多く翻訳され、印刷された作品がジョン・バニヤン(John Bunyan)の『天路歷程』(1684)であった。この書物が東アジアにおいて初めて翻訳されたのは、1853年にウィリアム・チャルマース・バーンズ(William Chalmer Burns、賓惠廉)によって中国で出刊されたもので、中国の多様な方言で続々と出刊された。このような中国語(漢語)『天路歷程』⁶は、その後日本と韓国での翻訳本に大きな影響を及ぼした。まず、日本と韓国両国がタイトルから中国と同じものを用い、その内容の翻訳文もかなり類似している。日本で初めて翻訳された『天路歷程』は、村上

³ 山口豊編、『岸田吟香『呉淞日記』影印と翻刻』(武蔵野書院、2012)を参照。

⁴ 1861年4月17日付ヘボン書簡、同上、81頁。;岡部一興編、『ヘボン在日書簡集』、教文館、2009、81。

⁵ 岡部一興、“聖書和訳とヘボン”、35。

⁶ John Bunyan、村上俊吉重譯、佑藤喜峰加筆、『天路歷程』、東京：十字屋書、1879。(初版)；約翰(パンヨン)、佐藤喜峰翻譯、『天路歷程意譯』、東京：十字屋、1879。；十字屋書舗は東京京橋区銀座3丁目に位置していた。

俊吉が英語ではなく中国語版から重訳した。また佐藤喜峰が加筆して日本石版の形式で1879年に初版発行した。⁷

『天路歷程』を韓国語に翻訳、出刊したのは、初期の長老派宣教師であるゲール(J. S. Gale、奇一)であった。カナダ出身の彼は、日本で行われた重訳の過程を経ないで直接英文からハングルに翻訳し、1895年に発行した。しかし、ゲールの『天路歷程』は、日本語翻訳版に登場する挿し絵の影響を受けて、画家金俊根に依頼して韓国的な画風の挿し絵を挿入したのが特徴である。また、ハングル木版本⁸ の場合は、ソウルの「三門出版社」(The Trilingual Press)から印刷(1895)されたが、活字本は近代印刷技術が発達していた上海でも印刷した。⁹ このように韓国の『天路歷程』は、結果的に中国と日本の訳書を参照にしながら中国での印刷技術に助けを借りた形であった。

しかし、20世紀以後からソウルにも近代式出版システムが完備され始めた。その結果、1919年には「朝鮮耶蘇教書会」がこの書物の再版を出し、1920年にはアンダーウッド夫人が未刊行の状態であった第2巻を「朝鮮耶蘇教書会」から翻訳、出刊した。¹⁰ 『天路歷程』以外にも「朝鮮聖教書会」(朝鮮耶蘇教書会)の創立初期の5-6年間は、『聖教撮理』(*Salient doctrines of Christianity*, 1890)、『上帝真理』(1891)、『訓兒眞言』(*Peep of Day*, 1891)、『張袁両友相論』(*The two friends*, 1892)¹¹、『救世眞詮』¹²、『徳慧入門』(1893)¹³ など中国で広く読まれ、出版界や読者からの検証がなされた諸本を翻訳紹介している。

このように、1890年に韓国で「朝鮮聖教書会」の創立後6年間に発行された諸本をみると、大部分中国で発行、紹介され、その名声が確認されたものなどであった。したがって、初期の韓国キリスト教出版は中国の蓄積された成果物に大きな影響を受けていたことが分かる。

⁷ 1879年版および1886年版以後から登場した日本での『天路歷程』改正版などの追加的な翻訳過程は下記のとおり。;バンヤン、松本雲舟譯、『天路歷程』、東京：警醒社書店、1913。; John Bunyan、布上莊衛譯、『天路歷程』、東京：英文學社、1928。; ジョウン・バンヤン、益本重雄譯、『天路歷程繪物語』、東京：教文館出版部、1936。; ジョウン・バンヤン、益本重雄譯、『全譯天路歷程』、東京：太陽堂、1939。

⁸ John Bunyan、J. S. Gale 譯、『턴로력덩』(木板本)、경성：The Trilingual Press、高宗 32年(1895)。

⁹ John Bunyan、奇一訳、『턴로력덩』、上海：發行処不明、1895。

¹⁰ John Bunyan、기일(奇一)訳、리창직(李昌植) 교열、『턴로력덩』、京城：Presbyterain Publication、1910。; 변연 요한、奇一訳、『턴로력덩』、京城：朝鮮耶蘇教書會、1919。; 변연 요한、원두우부인 訳、『턴로력덩 데 2 권 : 기독교부인 러[행]록』、京城：朝鮮耶蘇教書會、1920。; 변연 요한、기일譯述、『턴로력덩 데 1 권』、京城：朝鮮耶蘇教書會、1926。

¹¹ W. Milne、S. A. Moffett 訳、『장원량우상론』(張元兩友相論)、경성：조선예수교서회、1892。

¹² 馬根濟(Mackenzie, J. K)、『救世眞詮』、中國：華北書會、1891。

¹³ Griffith John、元杜尤訳、『덕혜입문』(徳慧入門)、京城：조선예수교서회、1893年(1915年再版)。

年度	書物のタイトル	著者 / 訳者
1890	聖教撮理	Griffith. John / H. G. Underwood
1891	聖經問答	J. Ross / Mrs. M. F. Scranton
1891	訓兒眞言	Mrs. Masston / M.F. Scranton
1892	張元兩友相論	M. Milen / S. A. Moffett
1893	救世眞詮	J. K. McKenzie / H.G.Underwood
1893	徳慧入門	Griffith. John
1894	引家歸道:	Griffith. John / F. Ohlinger
1895	眞理便讀三字經	Griffith. John / S. A. Moffett

この以外にも1910年の韓国併合以後、スコットランド長老派宣教師ジョン・ロス(John Ross)が中国で漢語で編纂した『員入教人規條』(*Manual for Catechumens*)¹⁴や1907年に中国宣教100周年を記念してドボス(Hempden C. DuBose)、ジャクソン(Jas Jackson)、ロス(John Ross)など数十人の宣教師が執筆した『中国宣教大会新旧約聖書註釋』(*The Conference Commentary of the Old and New Testaments*)などが翻訳され、1910年代から1930年代まで使われた。¹⁵

『天路歷程』と共にキリスト教の最も代表的な古典と言えるトマス・ア・ケンピス(Thomas à Kempis)の『キリストに倣いて』も、1891年に中国で『遵主聖範』¹⁶ というタイトルで初めて紹介され、1910年には日本語訳として『基督の模倣』¹⁷ というタイトルで出された。韓国では10年以上遅れて、1922年に李原毛が翻訳した『基督聖範』¹⁸ が出版され、2年後の1924年には聖公会司祭であるホジス(Hodges, Cecil Henry Noble、許世実)が中国のタイトルをそのまま借用して『遵主聖範』を朝鮮聖公会出版社から出版した。また、1918年から中国で発行された雑誌『聖經雜誌』¹⁹ や『聖經辭典』(1916)²⁰も1927年にハングルで翻訳、出刊²¹された。

¹⁴ J. Ross, Mrs. Scranton, 『원입교인규조』、경성: 예수교서회、1904.

¹⁵ The Korean Religious Track Society, Catalogue of Books and Tracts, Seoul: The Track House, 1912, 48. ; 李萬烈、玉聖得編訳、『언더우드資料集 4』, 129 頁から再引用。

¹⁶ Thomas à Kempis, 『遵主聖範』、京都(北京):美華書院、光緒 17 年(1891).

¹⁷ トマス・ア・ケムピス、日高善一訳、『基督の模倣』、東京: 内外出版協会、1910.

¹⁸ 토마스 아 켄피스, 이원모 訳、『기독교성범』、京城: 耶蘇敎書會、1922. ; Thomas A Kempis, 許世實訳、『遵主聖範』、京城: 朝鮮聖公會、1924.

¹⁹ 『聖經雜誌』(Bible magazine)、京城: 朝鮮耶蘇敎書會、1918 年 3/4 月号(第 1 卷第 1 号)-1941 年 11/12 月号(第 6 卷第 6 号)

²⁰ James Hastings, 上海廣學會編訳、『聖經辭典』、上海: 上海廣學會、1916.

2) 漢文書物の競争力弱化和翻訳の限界

初期に来韓した宣教師は、キリスト教の大衆宣教のために韓国でのキリスト教出版の言語である「ハングル」を採択した。中国で長期間宣教師として活動したネヴィウス(John Livingston Nevius)の宣教戦略を受け入れた韓国長老教会は、キリスト教出版の主要言語として「ハングル」について下記のように明示している。

すべての文書事業は漢字の拘束を脱して、純ハングルを使うのが私たちの目標とすべきである。²²

宣教師を中心にしたハングル使用の流れは、朝鮮耶蘇教書会が「本会は朝鮮語でキリスト教書籍と伝道誌、また定期刊行の雑誌類を発行し、全国にそれを普及させるため組織された」²³ と明らかにしているように、キリスト教出版界においては前提となっていた。このような中で、既存の韓国社会の出版市場を掌握していた漢籍に対する需要も漸進的に減少し、ハングル書籍の販売が急増することになった。

1899年には、『聖經問答』のハングル版が4,114部出版され売り切れとなったが、漢文版は670冊の在庫が残っていた。²⁴ 1905年には別に購入した漢籍の販売量が2,050冊であったが、1906年には812冊しか販売されなかった。²⁵ 1912-13年の朝鮮基督教書会報告書では、「118の中国語書籍があったが、販売がほとんど成り立たず、半額で割引販売をする」²⁶ という内容もある。このように、キリスト教出版が主導するハングル書籍市場の拡大は知識人が独占する漢文書籍の支配的文化に対する新しい挑戦であった。同時に、中国キリスト教出版界の韓国キリスト教出版に対する影響力は、翻訳上の限界によって困難な状態にあった。韓国の「東洋書院」が刊行した本格的な聖書註釈書シリーズ(全21巻)は、中国語翻訳本を重訳したものなどであり、それ以後多くの出版社で中国語聖書註釈書が多数翻訳出刊された。普及書館の『ガラテヤ人への手紙註釈』(1913年)の序文で、訳者は体系的な聖書神学の基盤なしに中国語註釈書の翻訳を行ったため、翻訳上の誤謬や限界がある点を認めている。

²¹ 長老教神學校教師會譯、『聖經辭典』、京城：朝鮮耶蘇教書會、1927.

²² C. C. Vinton, "Presbyterian Mission Work in Korea," *MRW*, Vol. 9, No. 6, Sep. , 1893, 671.

²³ “ 조선 예수교서회(朝鮮耶蘇教書會) 憲章,” 李章植、『大韓基督教書會百年史』、19-20.

²⁴ *Report of the Korean Religious Tract Society* (Seoul: Trilingual Press, 1899) 、 14.

²⁵ *Report of the Korean Religious Tract Society* (Seoul: Trilingual Press, 1906) 、 12.

²⁶ *Annual Report of the Korean Religious Tract Society*, 1912-1913 (Seoul: Korean Religious Tract Society, 1913) 、 6.

この書物はイギリスの最も大きな大学で多くの大学の博士が集まり、新旧約全書の各編を分けて、その真理を解釈して世界に紹介したものです。……今や浅薄な言葉で敢えて翻訳し、私たち朝鮮の多くの信者にとって有益になるだろうと考えるので、文法や文脈に違和感があり、翻訳が明らかではない部分が多いが、注意して共に学ぶならば、多少役に立つだろう。²⁷

ブルース博士の原著*The training of the twelve*²⁸も、韓国で『十二使徒訓練』²⁹ というタイトルでクラーク(W. M. Clark)と金弼秀によって翻訳、紹介されたが、序文で次のように翻訳上の限界と難しさを吐露している。

中国ですでに翻訳され基督教界において大きな成果を収めながら、私たち朝鮮教会でも同じ恩恵を得るために翻訳して紹介します。ただ一つ、申し訳ないことは翻訳が上手くできていないのではないかという恐れです。

以上考察したように、韓国におけるプロテスタント宣教初期には中国におけるキリスト教出版物の蓄積された資産が最も重要な参考資料になった。しかし、中国語訳書の重訳を通してもたらされた誤訳と翻訳の曖昧さなどは、神学的訓練が不足した翻訳者にとっては難しい課題であった。また、それは読者にも欠乏感を与えるという限界があった。結局、このような現実の中で行われた韓国併合は、おのずと日本キリスト教出版界の成果が韓国キリスト教出版に影響力を拡大していく転換点となった。

3. 植民地時代における日本キリスト教出版界からの影響

1) 日本語書物による支配構造の強化と朝鮮キリスト教出版界の抵抗

1910年、韓国併合によって朝鮮が日本の植民地になる前までは『天路歷程』などの事例で確認されるように、中国での近代キリスト教出版物が朝鮮に直接的に強い影響を及ぼした。すなわち、「欧米 → 中国 → 日本 → 韓国」という近代文物及びキリスト教の受容段階が一般化していたのである。しかし、1910年の韓国併合と同時に新しい局面を迎えることになる。すなわち、「日本」が一次的に接して修得してゆく対象、いわゆる「近代」の基本土台として位置づけられたのである。洪伊杓

²⁷ 류경상 編譯、『갈나디아인서주석』、(京城：普及書館、1913)、1.

²⁸ Bruce, Alexander Balmain, *The training of the twelve : or, Passages out of the Gospels, exhibiting the twelve disciples of Jesus under discipline for the apostleship*, Edinburgh : T. & T. Clark, 1871.

²⁹ 卑魯士著、康雲林、金弼秀訳、『十二使徒訓練』、京城：朝鮮耶蘇教書會、1931.

は『内地神学』、あるいは『内地キリスト教』という表現を通して、「朝鮮を植民地化した『帝国としての近代日本』が新しい一次的近代文明受容のための『核心空間』として置換された」³⁰と主張した。実際に、日本は近代化を急激に推し進めたため多様な西洋書籍を旺盛に翻訳、出版することで西欧世界に直接進出しなくても、いわゆる「内地」で近代文物を体得することができた。³¹その結果、韓国併合以後「外地」と転落した朝鮮の政治、経済、文化界だけではなく、キリスト教を含む宗教界でも「内地日本」はまず学習しなければならない対象となり、実際に併合以後から日本への留学生数も急増した。

このような日本の帝国主義による内地政策、また朝鮮の外地化過程の中で、ハングル書物は日本語や英語、ロシア語書籍と比べて相対的に貧弱なコンテンツ、専門性、多様性の制約を避けることができなくなった。結局、1920年代以後厳格な検閲を経たハングル書物の制限された内容と水準の限界によって、読者の間ではハングル書籍を忌避し、むしろ日本語書籍を直接購入する傾向が現われた。

現在の朝鮮社会の趨勢を語れば、朝鮮内で刊行される紙誌をはじめとして、一般図書は検閲制度が厳重なことから多少その内容において未熟な点があるが、日本で出刊された図書はそれほどひどくないので、多くの人は日本語書籍を通して新しい知識を得るのに努力している。³²

日本語書籍はその輸入が1920年代から大きく増加し、1930年に至っては輸入書籍の大部分を占めることになる。³³ 全景淵は「読書の回顧」という文章で、1920-30年代に韓国社会を支配した日本語書籍の支配現象について次のように証言している。

日本に留学する時、帰省して『湖岩全集』を買って読むことでようやくハングル書物を読む喜びを初めて味わったくらいである。ハングルで出版された学術書はほとんどない状況であった。したがって、読書という言葉は、日本書籍や西欧語本を読む時に用いられた。³⁴

チョン・ジョンファンは、「1920年代後半以後、少なくとも文字による言語生活においては、日本語

³⁰ 洪伊杓、『植民地時代における韓国キリスト教の日本認識: 「内地」概念を中心に』、延世大学博論、2014年、250。

³¹ 丸山真男、加藤周一、『翻訳と日本の近代』、岩波書店、1998。；최경옥、『翻訳과 日本의 近代』、(서울: 살림, 2006)。など参照。

³² 「朝鮮日報」、1929年10月23日。

³³ 千정환、“1920-30年代의 冊읽기와 文化의 変化、”尹해동 外、『近代를 다시 읽는다 2: 韓国近代認識의 새로운 패러다임을 위하여』、(ソウル: 歴史批評社, 2006)、60-61。

³⁴ 全景淵、“讀書の 回顧、”『思想界』、1955年10月号、188-189。

のヘゲモニーが量的、質的に知識人社会と一般大衆社会の両側ですべて巨大化していった³⁵と指摘している。このような中で、結局韓国の知識人グループのハングル書籍への忌避現象は拡大され、これは韓国のキリスト教出版界にも乗り越えなければならない大きな課題となった。

読むに値する書籍が多くない。英語書籍、日本語書籍がいくらかあるが、私たち朝鮮のキリスト者はまだそれを読み解く人が極めて少数である。このような書籍を翻訳して著すには、もちろんお金がかかり手間がかかる。また、よく売れないことが原因であるが、犠牲を負いながらもこのような事業をしなければ先覚者の責任を果たすことができないのである。³⁶

蔡弼近が指摘したハングル学術書籍の稀疎現象は、朝鮮総督府(日本政府)の厳格な検閲による自然な結果でもあったが、これは読者のハングル書籍に対する忌避心理にもつながっていた。このようなハングル出版物に対する読者の忌避はキリスト者の読書文化においても類似して現われた。

英語や日本語の書物を読むことを自慢して、朝鮮語の書物を読むことを恥ずかしがる人がいます。これは自らの顔に唾を吐く最も卑劣な考えです。朝鮮人を軽蔑し、結局は諸民族を奪う蛮行です。もちろん外国書籍を読まない方が良いと言うのではないです。外国語の書物もたくさん読まなければなりません。しかし自分の国で、自民族の頭から出て来た文章を自らの民族が読んでくれなければ、誰が読むことになるでしょうか。ですから、ますます執筆する人が減ってしまい、書物を作る会社が倒産します。……自国の国文学を投げ捨てれば、それは滅亡です。朝鮮文学を樹立することもキリスト者の責任です。キリストが今の朝鮮に来られたら、そうおっしゃるでしょう。(下略)³⁷

当時のほとんどの書籍をハングルで出版して普及していた「朝鮮耶蘇教書会」としては、ハングル書物を軽視する読書現象が一つの危機として考えられたはずである。そのため「朝鮮文学を樹立すること」がすなわち「キリスト者の責任」であると強調している。このようなハングル使用とハングル書籍購読に関する強調は、植民地時期におけるキリスト教会が遂行しなければならない一つの社会運動として発展していた。以下は、ハングル書籍購読を奨励する「基督申報」の記事である。

このような現象が読書界まで波及され、書物を読む人も朝鮮語書籍は軽視して外書を愛用

³⁵ 千正煥、“1920-30年代의 冊읽기와 文化의 变化、” 62.

³⁶ 蔡弼近、“조선교회(朝鮮教会)의 나아갈 길(中)、” 「基督申報」、1928年2月8日、1面.

³⁷ “朝鮮基督教과 文学運動” 「基督申報」、1930年10月29日、5面.

するようになった。もちろんそれら(欧米・日本-筆者註)は私たちよりも学問が深く、その内容も豊かであろう。しかし、一つの例を言えば、宗教書籍を同じ言葉で翻訳したが、日本語が朝鮮語より良いと言う人がいる。これは、外国文化に毒された者の偏見である。私たちは自らの物を愛すべきではないか。³⁸

母語で作った書籍や新聞雑誌が発売される統計を見ると実になさけない。人口の比例で見ても、その数字を指摘すること自体が恥ずかしい。敢えて統計によって語るまでもなく、母語で出版される書籍や新聞雑誌を経営する人々が、経済的損害のため閉業するという現実がより明らかな証拠になるだろう。それこそ「読む人がいてこそ、筆を持って出版する!」という嘆きが耳に響く。³⁹

このように 1920-30年代に韓国のキリスト教出版界はハングルを広く普及し、ハングル書籍によってキリスト教伝道の方向性を持続させるため、当時のハングル書籍に対する忌避と闘わなければならなかった。これは日本のキリスト教出版界の朝鮮半島進出と影響力の増大という現実の中で、そのことを認めながらも、同時に主体的な韓国キリスト教出版の樹立のために抵抗しようとする「二重構造」を見せていた。

2) 日本のキリスト教出版界が朝鮮のキリスト教出版に及ぼした影響

韓国併合以後、中国に蓄積された多様な出版物が韓国に直輸入された初期状況とは異なる局面が展開された。その結果、それまでは「欧米 → 中国 → 日本 → 韓国」というキリスト教及び近代文物受容の流れが、韓国併合以後は「欧米 + 日本 → 韓国」という形でその構造が変わり始め、韓国のキリスト教出版に対する日本の影響力が中国と比べてより拡張され始めた。ここでは、韓国併合以後に日本のキリスト教界の出版がどのような形で韓国のキリスト教出版に影響を及ぼしたかについて、いくつかの事例をあげて考察する。

a. 日韓の長老教会とメソヂスト教会の出版における性格と特徴

日・中・韓三国の最初の聖書翻訳史を見ると、共通してプロテスタント諸教派の中で「長老派」の宣教師の活躍が目立つ。モリスン、ミルン(中国)、ヘボン、ルーミス(日本)、ジョン・ロス、マッキンタイヤ(韓国、満洲)、アンダーウッド、レーノルズ(韓国)など、長老派の宣教師が非常に主導的で、積極的なリーダーシップを発揮したことがわかる。

³⁸ “文学運動의 教會的意味、”「基督申報」、1930年11月19日、4面。

³⁹ “筆者와 讀者(下)、”「基督申報」、1931年7月29日、1面。

日本と韓国の場合、出版事業においてはメソヂスト教会の宣教師たちがより積極的な態度を取ったように見える。日本で最も古いキリスト教界の出版社である「教文館」は、1873年に日本に到着した米国メソヂスト教会のマクレイ宣教師がチラシ福音や賛美歌、信仰問答集、教会規則などの翻訳、出版のために1885年に設立した。1891年には「メソヂスト教会出版社」(Methodist Publishing House)という名前で築地に建てられ、1896年には「教文館」と改名し現在に至る。1926年、また一つのキリスト教出版社である「日本基督改興文協会」と合併した後もメソヂスト教会の宣教師が中心的な役割を遂行した。一方、もう一つの代表的な日本のキリスト教界出版社である「新教出版社」は、太平洋戦争末期の1944年に戦時企業整備令が下されて、十に達するプロテスタント系統の出版社が一括統合された会社である。⁴⁰統合以前に、メソヂスト教会に連なる出版社は教文館と同様にウェスレー関連書籍を多数出刊した。

구분	教文館/新生社 など(日本)	三文出版社/耶蘇教書會 (韓国)
1880년대	『魏斯禮詳訓』(上海, 1881) 『實驗神學』(1888) 『스잔나·웨스레이女の傳』(1888) ⁴¹	
1890년대	『니우만說教』(不明) 『ジョン 웨스레伝 : 基督教中興者』(1891) 『ジョン 웨스레이之傳』(1893) 『웨스레이氏說教集』(1898) ⁴²	『미이미교회강례(美以美教會綱例)』(1890) 『성교촬요(聖教撮要)』(1890) 『상제진리(上帝眞理)』(1893) 『미이미교회문답』(1893) 『찬미가』(1895) 『세례문답』(洗禮問答)(1898) ⁴³

⁴⁰ 戦時動員体制、すなわち戦時下で強制合併された出版社は、長崎書店、新生堂、日曜世界社、日本聖書協会、教文館出版部、基督教思想叢書刊行会、愛之事業社、警醒社、一粒社、基督教出版社などである。『日本キリスト教歴史大事典』、東京：教文館、1988、983。

⁴¹ ウェスレー ショウクン、『魏斯禮詳訓』、上海：監理會、1881。；ジョン・ウェスレー著、シー・エス・イビー編、堀江景宣訳、『實驗神學』東京聖教書類会社、1888。；スペンセル女師著、元良米女譯、『스잔나·웨스레이女の傳』、東京：美以雜書會社、1888。(1892年にメソヂスト出版社から再版)

⁴² ジョン ウェスレー、中村平三郎訳、『約翰為斯列/니우만說教』(John Wesley : a sermon)、神戸：神戸南美出版委員、[出版年不明]、關西學院叢書；石坂龜治編、『ジョン 웨스레伝 : 基督教中興者』、東京：メソヂスト出版舎、1891。；チャールズ・ビショップ編、『ジョン、웨스레이之傳』、東京：メソヂスト出版舎、1893。；エス、エイチ、ウエイナイト編輯、エス、エイチ、ウエイナイト、櫻井成明、菱沼平治共訳、『웨스레이氏說教集』(Wesley's standard sermons)、吉岡美國、1898。

⁴³ 『美以美教會綱例』、1890；『찬미가』、서울: 미이미교회년화회、1895。

1900년대		『月恩青年會著述記』(1901) 『세례문답』(1907), 『감리교회 조례』 ⁴⁴
1910년대	『基督者の完全』(1918) ⁴⁵	W.C.Sweare, 『성례:감리교회(포의,반피,혁의)』 (1911) J.D.VanBurskik 역, 『그리스도인의 완전론』 (1913) Nehemiah Curnock, 『요한 웨슬레 행적』(life of john wesley, 1915, 예수교서회) ⁴⁶
1920년대	『ジョン・ウエスレー信仰日誌』(1929) 『ジョン・ウエスレー傳』(1929) 『ジョン ウェ스레이說教・論文・書簡』(1929) ⁴⁷	『미감리교회 교의와 도례』(1921) 『웨슬레先生の 道理的 講道』(1923) 『美監理教會法典』 ⁴⁸
1930년대	『ジョン・ウエスレー傳』(1936) 『ジョン・ウエスレーの回心と其前後』(1936) 『ジョン・ウエスレーと音楽』(1937) 『ウエ스레이信仰日記』(1938-41) 『ジョン・ウエスレーの信仰』(1938) ⁴⁹	『愛의 使徒 웨슬레의 生涯와 事業』(1931) 『基督敎의 原理』(정경옥, 1935) 『요한 웨슬레』(1938) 『基督敎神學概論』(정경옥, 1939) ⁵⁰
1940년대	『家庭宗教の建設者スザンナ・ウエスレー』(1940)	

⁴⁴ 『月恩青年會著述記』、皇城: 美利美教會月恩青年會.(光武 5-6, 1901-1902). ; W. B. Scranton,

『세례문답』、경성: 미이미감리교회 1907. ; F. E. C. William, 안창호편, 『감리교회조례』、1908.

⁴⁵ ジョン・ウエスレー著、赤澤元造訳、基督者の完全』、東京: 日本基督教興文協會、1918.

⁴⁶ 요한 웨슬레, 반복기訳, 『그리스도인의 완전론』(基督人之完全論、*Christian perfection*)、경성: 조선예수교서회、1913.

⁴⁷ ジョン・ウエスレー著、賀川豊彦、黒田四郎共訳、『ジョン・ウエスレー信仰日誌』、東京: 教文館出版部、1929. ; 田中龜之助、『ジョン・ウエスレー傳』、東京: 教文館出版部、1929. ; ジョン・ウエスレー著、松本卓夫、草間信雄共譯、『ジョン ウェ스레이說教・論文・書簡』、東京: 新生堂、1929.

⁴⁸ Methodist Episcopal Church、奇怡富譯、『미감리교회 교의와 도례』、京城: 朝鮮耶蘇敎書會、1921. ; 河鯉泳、金仁泳共譯、『웨슬레先生の 道理的 講道』(*John Wesley sermons*, 卷 2)、京城: 監理教會協成神學校、1923. ; Methodist Episcopal Church、奇怡富外編譯、『美監理教會法典』、京城: 基督教彰文社、1926.

⁴⁹ 마크도ナルド、『ジョン・ウエスレー傳』、東京: 一粒社、1936. ; 大石繁治、『ジョン・ウエスレーの回心と其前後』、東京: 教文館、1936. ; 津川主一、野呂信次郎共著、『ジョン・ウエスレーと音楽』、東京: 教文館、1937. ; ウェ스레이著、山口徳夫譯註、『ウエス레이信仰日記』(完譯, 第 1-5 卷)、東京: 傳道戰線社、1938-1941. ; 徳憲義、『ジョン・ウエスレーの信仰』、東京: 新生堂、1938.

⁵⁰ Wesley, John, 宋興國訳、『愛의 使徒 웨슬레의 生涯와 事業』、京城: 朝鮮耶蘇敎書會、1931.; 鄭景玉、『基督敎의 原理』、京城: 監理教會神學校、1935. ; 史越[外]編、『요한 웨슬레』、京城: 基督教朝鮮監理會總理院教育局、1938. ; 鄭景玉、『基督敎神學概論』、京城: 監理教會神學校、1939.

	ウエスレーの『ロマ書要解』(1940) ⁵¹	
--	-----------------------------------	--

その結果、教文館を中心にメソヂスト教会の教理書やメソヂスト教会の創始者であるジョン・ウエスレー関連図書が非常に活発に刊行された。すでに19世紀に、ウエスレーに関する評伝は英文で多数出版され日本にも紹介⁵²されていたので日本語翻訳作業も活性化した。このような現象は韓国の最初の近代式出版社であるメソヂスト教会の「三門出版社」が設立当初からメソヂスト教会関連図書を積極的に発行したこと、そしてそれ以降「長老派・メソヂスト」連合で組織された「朝鮮耶蘇教書会」が設立されてからもハーディ(R. A. Hardie, 1865-1949)や柳滢基のようなメソヂスト教会の人物が積極的にウエスレー関連図書を発行したことと類似する現象である。以上、長老教会が聖書翻訳、すなわち霊的、宣教的観点から集中して文書活動を展開した反面、メソヂスト教会は出版事業、すなわち知的、教育的観点に集中した文書活動を展開した傾向があると評価できる。

このように出版事業に力を入れたメソヂスト教会とは異なり、日韓両国の長老派教会は自らの創始者であるジャン・カルヴァン(Jean Calvin)に関する紹介が非常に遅れた。日本のカルヴァン研究者である渡辺信夫によると、今村好太郎(1883-1973)によって『キリスト教綱要』の第1巻に当たる内容のみ翻訳され、『キリスト教原理』というタイトルで出版されたが、その翻訳に問題が多いという黒崎幸吉(1886-1970)など無教会主義グループからの強い批判を受け、結局今村が追加翻訳を諦めたほど日本においても1930年代まではカルヴァン研究が未熟であった。また、それ以後、中山昌樹(1886-1944)が1934年から39年まで新教出版社と新生党から順次発行した『キリスト教綱要』や、郷司慥爾(1887-1948)が新生党から発行した『カルヴァン神学概要』などは、当時朝鮮における長老教会の中心地であった平壤の諸教会と平壤神学校(現、長老会神学大学)が大量注文して船で送ったことを確認したと回顧している。⁵³ 日本でカルヴァンの著述が遅れて紹介されたため、韓国長老教会でのカルヴァンに関する紹介もまた遅れていったことが確認できる。

⁵¹ 田中龜之助、『家庭宗教の建設者スザンナ・ウエスレー』、東京：教文館、1940。；ジョン・ウエスレー、肥後吉秀訳、『ロマ書要解』、東京：新生堂、1940。

⁵² 以下は日本のキリスト教主義大学の図書館が持っている欧米からのウエスレー関連著作である。；Robert Southey, *The life of John Wesley*, Hutchinson, 1820。；Richard Watson, *The life of the Rev. John Wesley*, Hoyt, 1831。；*The life of the Rev. John Wesley*, Southern Methodist Publishing House, 1884。；C.T. Winchester, *The life of John Wesley*, Macmillan, 1906。；edited by Nehemiah Curnock, *The journal of the Rev. John Wesley, A.M.*, Standard ed.. -- R. Culley, 1909-1916。

⁵³ 2015年8月1日、「第6回東アジアキリスト教交流史研究会ワークショップ」(明治学院大学)で渡辺信夫のコメント(証言)参照。渡辺信夫は、1962年に『キリスト教綱要』(総6冊)を完訳出刊し、日本カルバン学会会長を歴任した。

区分	日本	韓国
1920년	カルバンの『羅馬書講解』(1928) 『キリスト教原理』(第1巻のみ、1929) ⁵⁴	
1930년대	『信仰とは何ぞや』(1931) 『エペソ書講解』(1931) 『カルヴィン基督教綱要』(1934) 『カルヴィン神学概要: 神観・基督論・年譜』(1935) 『ジェネヴァ教理問答』(1937) 『カルヴィン説教集』(1938) 『コロサイ書註解』(1939) 『カルヴィン小傳・年譜』(1939) 『カルヴァン小論集』(1939) ⁵⁵	『칼빈의 생애와 그 사업』(저서, 1935) 『칼빈主義: 豫定論』(역서, 1938) ⁵⁶
1940년대	『エペソ書註解』(1940) 『ジャン・カルヴァン』(평진, 1941) 『テモテ前書註解』(1941) 『ジョン・カルヴィン: 人物と業績』(1942) 『カルヴァン説教』(1943) ⁵⁷	

⁵⁴ カルヴィン、佐藤繁彦訳、『羅馬書講解』、東京: ルッター研究会、1928.; 今村好太郎、『キリスト教原理』(第1巻のみ)、名古屋、一粒社、1929.

⁵⁵ カルヴィン、佐藤繁彦訳、『信仰とは何ぞや』、東京: ルッター研究会、1931.; カルヴィン、佐藤繁彦訳、『エペソ書講解』(再版)、東京: ルッター研究会、1931.; Jean Calvin、中山昌樹譯、『カルヴィン基督教綱要』(第1巻第1篇・第2篇、第2巻第3篇、第3巻第4篇)、東京: 新教出版社/新生堂、1934-1939.; 郷司慥爾訳著、『カルヴィン神学概要: 神観・基督論・年譜』、東京: 新生堂、1935.; カルヴィン、外山八郎譯、『ジェネヴァ教理問答』、東京: 長崎書店、1937.; カルヴィン、竹森満佐一譯、『カルヴィン説教集』、東京: 新生堂、1938.; カルヴィン、松谷義範譯、『コロサイ書註解』、東京: 長崎書店、1939.; 郷司慥爾、『カルヴィン小傳・年譜』、東京: 新生堂、1939.; Jean Calvin、波木居齊二編譯、『カルヴァン小論集』、東京: 岩波書店、1939.

⁵⁶ 金泰福、『칼빈의 생애와 그 사업』、京城: 조선예수교서회、1935.; Loraine Boettner、朴亨龍譯、『칼빈主義: 豫定論』、韓国: 예수교長老會總會宗教教育部、1938.

⁵⁷ ジョン カルヴィン、松谷義範、石川静子共譯、『エペソ書註解』、東京: 長崎書店、1940.; エミール・ドゥメルグ (Doumergue, Emile)、益田健次、山永武雄共譯『ジャン・カルヴァン』、東京: 長崎書店、1941. (*Le caractère de Calvin* (2nd ed.) La Cause, 1931.); カルヴィン、松谷義範譯、『テモテ前書註解』、東京: 長崎書店、1941.; ウオー

1950년대	『キリスト教綱要(抄)』(1958) 『信仰の手引き』(1956) ⁵⁸ それ以外にも多数発行(省略)	『칼빈主義』(역서, 1956) 『칼빈주의』(역서, 1959) ⁵⁹
1960년대	『キリスト教綱要』(全6巻, 1962-65) 『キリスト教綱要(抄)』(全体抄訳, 1962) ⁶⁰ それ以外にも多数発行(省略)	『칼빈의 모습』(역서, 1960) 『基督教綱要撰』(역서, 1960) 『칼빈의生涯와神學思想』(저서, 1963) 『基督教綱要』(역서, 1964) ⁶¹
1970년대	多数発行(省略)	『칼빈주의자가 본 알미니안 주의』(역서, 1974) 『칼빈주의와 알미니안주의』(역서, 1975) 『칼빈주의 사상과 삶 1』(저서, 1978) 『칼빈:生涯와思想』(저서, 1978) 『칼빈의神學』(역서, 1973) 『칼빈神學의現代的理解』(공저, 1978) ⁶²
1980년대	多数発行(省略)	『新約聖經註釋』(역서, 1980)

フィルド、松谷義範譯、『ジョン・カルヴィン：人物と業績』、東京：長崎書店、1942.；カルヴィン、森有正譯、『カルヴァン説教』、東京：長崎書店、1943.

⁵⁸ 渡辺信夫訳、『信仰の手引き』、新教新書、1956.；H. 카ー、竹森満佐一訳、『キリスト教綱要(抄)』、新教出版社、1958.など。

⁵⁹ A. 데이큰(A. Dakin)、李炳燮訳、『칼빈主義』、서울:大韓基督教書會、1956.(Arthur Dakin、*Calvinism*、London: Duckworth、1940.)；H. 헨리 미터 원저；김진홍、박윤선 공역、『칼빈주의』、서울: 한국개혁주의신행협회、1959.

⁶⁰ 渡辺信夫訳、『キリスト教綱要』(全6巻) 新教出版社、1962-65.；小平尚道、『キリスト教綱要(抄)』(全体の抄訳)、河出書房新社、1962.など。

⁶¹ T. H. L. Parker、김재준訳、『칼빈의 모습』、서울: 대한기독교서회、1960.; 존 칼빈、휴 톰슨 커 編、李鍾聲訳、『基督教綱要撰』、서울: 大韓基督教書會、1960.；全景淵、『칼빈의生涯와神學思想』、서울: 大韓基督教書會、1963. (재판: 韓神大學出版部、1984); 존 칼빈、韓哲河、申福潤共譯、『基督教綱要』(第1卷)、서울: 生命의말씀社、1964.

⁶² 크리스토퍼 네스、강귀봉 譯、『칼빈주의자가 본 알미니안 주의』、서울: 생명의말씀사、1974.；D. N. 스틸、C. C. 토머스 공저、김남식訳、『칼빈주의와 알미니안주의』、서울: 한국성서협회、1975.；정성구、『칼빈주의 사상과 삶 1』、서울: 한국성서협회、1978.；李鍾聲、『칼빈:生涯와思想』、서울: 大韓基督教出版社、1978.；빌헬름 니이젤、李鍾聲訳、『칼빈의神學』、서울: 大韓基督教書會、1973.；李章植外、『칼빈神學의現代的理解』、서울: 韓國神學大學出版部、1978.

		『요한 칼빈의 神學眞髓 : 주석과 설교집에서 발췌』(역서, 1985) 등 다수. ⁶³
--	--	--

長老教会側でカルヴァン関連著述の出版が遅れた理由を次のようにいくつか推測することができる。

第一に、先述したように長老教会の宣教師が自教派の神学的教理を重視するより「聖書翻訳」などにより力を傾けていたからである。

第二に、長老教会と改革派教会の教派的、教理的優越感と、相対的にメソヂスト教会が持っていた神学的劣等感である。すなわち、ルターとともに宗教改革を主導した代表的な神学者であるカルヴァンの神学を背景にした長老教会は、神学的安定感と優越感、自信と聖書を中心にした保守神学に傾斜する中で、聖書翻訳に集中することができたのである。一方、宗教改革時代と比べると、遅い時期に英国国教会から生まれたメソヂスト教会は、ジョン・ウェスレーの神学思想を体系化し、メソヂスト教会の長所と優越性を出版物を通して広く知らせようとする意志と欲求が聖書翻訳と比べてむしろ強かったのである。これは多様な教派が宣教現場で熾烈に競争した状況下で、メソヂスト教会が自教派の価値を高めるために出版事業により集中することになったという背景である。

第三に、宣教師の言語習得の問題である。日本でも主にイギリスとアメリカ、カナダなど英語圏出身の宣教師が主流をなした。彼らの母語は英語だったので、当然英文資料の日本語への翻訳出版作業は活性化していった。結局、ウェスレーの文献は日本語翻訳がより容易であった一方、ルターやカルヴァンの文献は、ラテン語を基本にドイツ語やフランス語に精通してこそ翻訳出版することができた。しかし、アメリカやスコットランドから来た長老教、改革派宣教師の教育水準はラテン語と仏語などを上手に駆使し、日本語にまで翻訳することができる力量には至っていなかったようである。その結果、ウェスレーやメソヂスト教会教理書籍などが19世紀末から盛んに出版されたことに比べて、カルヴァン関連書籍の翻訳出版は数十年遅れることとなった。

第四に、日本の改革派及び長老教会が「横浜公会」による連合組織教会を志向したという点である。その過程で自ずから組織の一元化を模索することに集中し、「教派主義」的な教理を過度に打ち立てることを自粛していたようだ。そのような組織統合の努力にもかかわらず、以後明治学院や東京神学社の分裂、そして神戸神学校と大阪神学院の分立など、改革派及び長老教会内部の力が分散する流れが続き、カルヴァン関連の教理書籍の出版のために力も結集されることが難しかったようである。

⁶³ 존 칼빈, 존칼빈聖經註釋出版委員會譯編, 『新約聖經註釋』, 서울: 聖書教材刊行社, 1980.; 사무엘던 編, 김득용訳, 『요한 칼빈의 神學眞髓 : 주석과 설교집에서 발췌』, 서울: 성광문화사, 1985.

日本の代表的な牧師、神学者である賀川豊彦が結核の闘病直後にウェスレーの『信仰日誌』⁶⁴を直接翻訳したが、貧民救済事業と社会運動に献身するほど、ウェスレーから大きな影響を受けて実践的なキリスト者の模範を見せたこと⁶⁵も、このような近代日本のキリスト教の出版動向とある程度は関係があると考えられる。つまり、若い頃の賀川はウェスレー書籍に簡単に接することができたが、むしろ自分が属した長老教のカルヴァンに関する書物には接することができなかった、という状況は彼が教派主義的思想家ではなく、実践的な活動家として生き、結果的に日本のキリスト教史の一ページを変えた面があるからである。そのようなことから、近代キリスト教出版の動向に関する考察は、キリスト教思想史だけではなく、キリスト教社会運動史などを再評価するためにも意味のある観点を提供する。

b. キリスト教入門書および信仰の証集の影響

朝鮮耶蘇教書会は植民地化がある程度強まった1920年代に入り、代表的な日本人キリスト者の信仰証書や、基本的な信仰解説書などが積極的に紹介され始めた。例えば、今井革が改宗に関する信仰遍歴を書いた『予が改宗の顛末：佛門を出でゝ基督者となりし理由』(1914)⁶⁶ が7年後の1921年に『予의 改宗의 顛末』というタイトルで、金森通論の日本語本『信仰のすゝめ』(1916)⁶⁷ が2年後に英語に翻訳されて西欧社会に広く知られ、その4年後に『基督教의 信仰』(1922)⁶⁸ というハングル題目で翻訳出刊された。

また日本救世軍の開拓者である山室軍平が、1899年に著した代表作『平民の福音』⁶⁹ が、韓国語版はベアード(W.M.Baird、裴緯良)と助力者などが参加して1925年に救世軍營で直接、民営出版社(大同印刷株式会社)に印刷を委託して出刊された。この本の韓国語版序文をここで紹介する。

この本は、日本救世軍書記長官正領の「山室軍平」氏が著した本です。内容は、普く魂を救う事業に関する福音の権威と世の人々が当然認めるに値するその理由を明らかにするのに適切

⁶⁴ ジョン・ウェスレー著、賀川豊彦、黒田四郎共譯、『ジョン・ウェスレー信仰日誌』、教文館、1929。

⁶⁵ 賀川がウェスレーから受けた影響については下記の論文を参照。；野村誠、「賀川豊彦とウェスレー・メソジスト運動—Union Mysticaの概念から」、賀川豊彦記念松沢資料館編、『日本キリスト教史における賀川豊彦—その思想と実践』、東京：新教出版社、2011年、496-524。

⁶⁶ 今井革、『予が改宗の顛末：佛門を出でゝ基督者となりし理由』、東京：日本基督教興文協會、1914。；Rev. K. Imai, 裴緯良(William M. Baird) 訳、『予의 改宗의 顛末』(*Why I Left Buddhism and Became a Christian*)、京城：朝鮮耶蘇教會、1921。

⁶⁷ 金森通倫、『信仰のすゝめ』、東京：警醒社書店、1916。

⁶⁸ 金森通論(P. L. Kanamori)、W. M. Baird 訳、『그리스도교의 신앙』、경성：예수교서회、1922。

⁶⁹ 山室軍平、裴緯良訳、『평민의 복음』、京城：救世軍營、1925。

な本です。この本がすでに205版目が出版されたので、この本に関する世の人々の関心と価値がどれほどのものであるのかは充分推測できるでしょう。……この本が日本でこのように発行された事に感応して、ハングル翻訳にも大きな成功があることを予想する同時に、救世軍大将ブラムウェル・ブース(Bramwell Booth)氏の極力伝えなさいという囑託によって発行することになりました。 - 朝鮮救世軍司令官 参将裴日秀⁷⁰

このように日本で200版以上出版された反響を韓国で翻訳紹介する重要な根拠として提示している。日本で検証された出版物の中から厳選されて韓国語版の出版が成り立ったのである。山室はすでに日本で『青年への警告』(1911)、『公娼全廃論』(1911)、『禁酒の勧め』(1912)など⁷¹を著しながら、キリスト者の実在的な生活の実践問題を集中的に扱った。キリスト者の実在的な倫理問題に没頭した彼の考察が凝縮され、1923年に出された二冊の本、『労働の宗教的意義』⁷²と『人生の旅行』⁷³はそれぞれ10年後、12年後に朝鮮耶蘇教書会から韓国語で翻訳出版されることになる。

c. 神学専門書籍の影響

韓国の神学者も日本の神学者の多くの著述に多様な影響を受けた。宋昌根が1923年に発行した『パウロと彼の信仰』も、その数年前に日本で梶原長八郎によって類似する『パウロの人物と信仰』が出刊され、パウロ神学に対する関心を湧きあがらせたため、それなりの影響を及ぼしたと考えられる。

『耶蘇生活의 研究』(1926)も、1917年にボースウォースが発行した*Thirty studies about Jesus*を1922年に日本語で翻訳された『イエス研究』⁷⁴に影響を受けたものであり、四福音書に描写された多様なイエス・キリストの存在意味を究明した『キリストの四肖像』(1927)⁷⁵という本も、同様に日本にす

⁷⁰ 山實軍平、裴緯良訳、『평민의 복음』、1.

⁷¹ 山室軍平、『青年への警告』、東京：警醒社書店、1911.；山室軍平、『公娼全廃論』、東京：警醒社書店、1911.；山室軍平、『禁酒の勧め』、東京：救世軍日本本営、1912.

⁷² 山室軍平、『労働の宗教的意義』(民衆基督教叢書)、東京：救世軍出版及供給部、1923.；山室軍平、박원철訳、『로동과 기독교』、경성：조선예수교서회、1933.

⁷³ 山室軍平、『人生の旅行』、東京：救世軍出版及供給部、1923.；山實軍平、조신일訳、『인생의 여행』、京城：예수교서회、1935.

⁷⁴ Edward Increase Bosworth、*Thirty studies about Jesus*、Association Press、1918、c1917.；ボースウォース、千葉勇五郎訳、『イエス研究』、東京：開拓社、1922.；B. I. Bosworth、康雲林、金弼秀訳、『예수生活의 研究』、京城：朝鮮耶蘇教書會、1926.

⁷⁵ Soltau、George、*Four portraits of the lord jesus Christ*、New York、C. C. Cook、1905.；ソルトウ、溝口悦次訳、『基督之四肖像』、東京：警醒社書店、1912.；George Soltau、康雲林、金弼秀訳、『그리스도의 四肖像』、京城：朝鮮耶蘇教書會、1927.

でに(15年前)翻訳されたものを参考にして出された。この二冊の本の発行を主導したクラークは、英語序文の中で次のように日本語訳を底本として参考にしたことを明らかにしている。

“Dean Bosworth of Oberlin is well known to all religious leaders in the United States as a teacher of rare ability. ... The major part of the work of translation was done by the Rev. Kim Pil Su from a Japanese translation.” (W. M. Clark, “PREFACE”)

“This book is by the Rev. George Soltau, whose sons are actively engaged in missionary work at Chungju and Pyeng Yang, so that there is an especial appropriateness in issuing this translation, made by the Rev. Kim Pil Su, from the Japanese edition.” (Rev. W. M. Clark, D.D. “FOREWORD”) ⁷⁶

すなわち、上記の二冊の本は英文書籍がすでに確保されているにもかかわらず、英文からハンゲルへと直接翻訳したのではなく、金弼秀が日本語訳書をハンゲルに訳したことを確かめている。『キリスト生活の研究』(1926)と『キリストの四肖像』(1927)の日本語とハンゲルを比べて見ると、文脈と文体も類似し、大部分の漢字語が一致していることを確認することができる。

<i>Thirty studies about Jesus (1917)</i>	
『イエス研究』(1922)	『예수생활의 연구』(1926)
イエスの生涯、少なくとも、初の十一分の十は、スリヤの一村落の有用な一員として、静に過ごされた。彼は善い家庭と四人の弟と、少なくとも二人の妹とを有して居られた。父は大工。(5卒)	예수의 처음 生涯는 적어도 十一분의 十은 수리아 一村落의 有用한 一員이 되야 靜淑하게 지내었으니. 더는 善한 家庭과 四人의 弟와 二人의 妹가 잇섯고 父는 木手 이엇더라. (p.5)

<i>Four portraits of the lord jesus Christ (1905)</i>	
『基督之四肖像』(1912)	『그리스도의 四肖像』(1927)

⁷⁶ George Soltau, 康雲林、金弼秀訳、『그리스도의 四肖像』、京城：朝鮮耶蘇教書會、1927.

<p>ジョージ、ソルト師は一八四七年二月四日を以て英國プリモウスに生るヘンリー、ダブリュー、ソルトウ氏の第五子にして其長男なり。父母共に甚だ篤信敬虔にして夙に家宗を捨てプリマウスブレズレンの新教に歸依し、多大の収益ある法律家の職を擲ちて教役者となれり。神は之に福するに多くの兒女を以てし彼等は皆其親に倣らひて此世に於ける一切の損失は即ち得なりとの信念を持し主の葡萄園の園守となれり。(“ジョージ、ソルト師の略傳”, 『基督の四肖像』, 3-4쪽.)</p>	<p>쪄지, 솔토 師는 一八四七年 二月 四日 에 英國 푸리모스에 出生하니 헨리, 따불유, 솔토 氏의 第五子로서 其長男이 되니라. 父母와 함께 篤信敬虔함으로 일즉이 家宗을 捨하고 프리모스프레즈렌의 新教에 歸依하야 多大한 收益이 잇는 法律家의 職을 擲하고 教役者가 되니라. 上帝는 더의게 福을 주샤 만흔 兒女를 賜하섯는데 彼等은 다 그 先親을 效倣하야 此世에서 一切의 損失은 卽得이 된다고 信하는 信念을 把持하고 主의 葡萄園의 園丁이 되니라. (“ 쪄지, 솔토 師의 略史”, 『 그리스도의 四肖像』, p.1.)</p>
--	---

これ以外にも、『キリスト模範』(1929)という翻訳本に日本ですでに30年前(1891)に翻訳されたものを参考にしたこと⁷⁷、1930年に出版された『印度途上のキリスト』も5年前*The Christ of the Indian road* (1925)が『印度途上の基督』(1929)として日本語で訳されたことを参考にし、翻訳出版されたことがある。⁷⁸注目すべき点は、以前には中国語訳書のタイトルをそのまま使用した傾向と異なり、日本語訳の表現をそのまま受容した点である。

本書はすでに色々他の国々の方言で翻訳が出されたので、一般キリスト教界に大きな影響を与えた名著書である。今は朝鮮で邦語で出版されるのは遅れた感じがある。しかし、朝鮮人の中にもすでに英文および日本語訳を通してこの本の存在とその内容を熟知している人々が多くなった。本書を朝鮮教会の読書界で知らない者はいないほどだ。それゆえ、これまで耳にタコができるほど聞いていた書を朝鮮語で読む機会を得た朝鮮教会ではこれからこれを歓迎すると信じる。⁷⁹

⁷⁷ Stalker, James, *Imago Christi : the example of Jesus Christ*, New York, A. C. Armstrong & son, 1889.; ゼームス・スタウカル、植村正久、田中達合訳、『基督のすがた』、東京：南海堂、1891. ; Stalker, James、김필수、오천영、W. M. 클락訳、『그리스도 모범』、京城：朝鮮耶蘇教書會、1929.

⁷⁸ Jones, E. Stanley(Eli Stanley) 、*The Christ of the Indian road*, New York、Cincinnati、The Abingdon press、1925. ; スタンレー・ジョーンズ、金井為一郎訳、『印度途上の基督』、東京：一粒社、1929. ; 스탠리 존스、朴斗煥訳、『印度途上の 그리스도』、京城：朝鮮耶蘇教書會、1930.

⁷⁹ 스탠리 존스、朴斗煥訳、『印度途上の 그리스도』、1.

その他にも日本で先に翻訳された神学専門書籍は、その価値が検証されたものなどがハンゲルで続々と翻訳された。例えば、『キリストの事実』(1930)⁸⁰や『仰慕の生活』(1930)⁸¹、『神様の一生』⁸²などがそれである。カーネギー・シムソン(Dr. P. Carnegie Simpson)が著した『キリストの事実』も前述した何冊かの訳書と同様に、序文(Foreword)で「This book has been translated from the Japanese translation, by the Rev. Kim Pil Su.」と明示し、日本語訳書を参考にしたことを明らかにした。特に、この本は題の表現も日本語翻訳と同じ漢字表現を使っている。以下の表を見ると、日本語訳の漢字表現との類似性を確認することができる。

<i>The fact of Christ : a series of lectures (1900)</i>	
『基督の事実』(1912)	『그리스도의 사실』(1930)
<p>此の書の原著者ピー・カーネギー・シムソン氏は蘇格蘭グラスゴー府レンフィールド教會を牧し、同國少壯宗教家の一人である。紀元一千八百九十九年の冬、其の教會に於て、重に指導者の爲に講演したもので、最も簡潔に基督教の眞髓が基督の事實に在ることを論述したのが此の書である。氏は此の書の外に『人生の事實』及び『總長レエニー博士の傳記』を著はして居る。(譯者序文, i頁.)</p>	<p>此書の 原著者 피, 가네기, 심푸손 氏は 蘇格蘭 글네스코城 교회를 牧하였던 少壯한 宗教家の 一人이다. 主后 一千八百九十九年冬에 그 教會에서 指導者를 爲하야 講演을 하였는데 가장 簡潔하야 그리스도敎의 眞髓는 그리스도의 事實에 在함을 論述한 것이 卽此書이다. 氏は 此書外에 『人生의 事實』이라 題한 冊을 此書와 兄弟格으로 著한 것이 있다. (序文)</p>

⁸⁰ Simpson, P. Carnegie, *The fact of Christ : a series of lectures*, New York: Fleming H. Revell Co. , 1900. ; 피・カーネ기・시ムソン, 千磐武雄訳、『基督の事実』、東京: 日本基督教興文協会、1916. ; 카네기 심손, 康雲林、金弼秀訳、『그리스도의 사실』、京城: 朝鮮耶蘇敎書會、1930.

⁸¹ Drummond, Henry, *The greatest thing in the world*, New York, J. Pott & co. , 1890. ; 헨리・드람몬드, 横井時雄訳、『吾界最大のもの』、日本宇宙神教々会、警醒社書店、1891. ; Drummond, Henry, 정상훈訳、『양모의 생활』、京城: 朝鮮耶蘇敎書會、1930.

⁸² Dickens, Charles, *The life of Our Lord : written expressly for his children*, London: Associated Newspapers Ltd. , 1934. ; 데이킨즈, 岩橋武夫訳、『イエス様の御生涯』、東京: 三省堂、1934. *(同じタイトルの日本人による著書も同年出版されたほど、すでに1930年代から「歴史的イエス」に関する研究に関心が高まっていた。; 益本重雄, 『イエスさまの御一生』、東京: 日曜世界社、1934. ; 찰스 덕큰쓰, 유찬기訳, 『주님의 일생』、경성: 예수교서회, 1934.)

<p>古今の宗教家の内で最も偉大なる耶蘇は、嘗て其の初期の弟子たちに対し一つの問を發して答を得、その告白を基礎としてその上に己が教會を建設せんことを宣言した。ここに彼が何を以て宗教の論點とし、又其の本来の起點としたかを明らかにすることが出来る。されば耶蘇の爲られたやうに宗教問題の解決を圖ることは常に彼が最上權威を有つて居る基督教ばかりでなく、又凡ての宗教問題を解決するに於て最も有効な方法であらう。(本文, 1頁.)</p>	<p>古今의 宗教內에서 가장 偉大한 이는 예수(耶蘇)이다. 예수는 일즉이 最初의 弟子의 對하야 一問을 發하야 對答을 얻어가지고 그의 告白을 基礎삼고, 그 위에 自己의 教會를 建設할 일을 宣言하였다. 그런즉 여기서 그 무엇을 가지고 宗教의 論點을 삼았으며, 이는 그 本来의 起點을 삼은 것인가를 明白하게 볼 수가 있나니 그런 故로 예수의 하시라는 宗教問題의 解決을 圖得 하자는 것은 單只 最上의 權威를 가져 잇는 그리스도教 이 아니요 모든 宗教問題를 解決함에도 가장 有効한 方法이 될 것이라 한다.(p.1.)</p>
---	---

このように1920年代以後の韓国のキリスト教神学界は、日本の多様な西欧神学書籍の翻訳成果に過度に寄り頼み、キリスト教出版を通して韓国的な神学の概念と用語を新たに造って討論する過程をまともに経ることができなかつた。すでに確保された西洋書籍に関して充実に翻訳し、解釈するためには、専門性が足りなかつたという限界もあるが、すでに日本で翻訳された日本語書籍を模本として「重訳」に依存するという便宜主義的な態度も問題であつた。

d. キリスト教社会主義および社会問題関係著作

1922年、金森通倫の書物を翻訳紹介したことに続き、1929年にはもう一人の代表的な日本人キリスト者指導者である賀川豊彦の著作『イエスの宗教とその眞理』(*The Religion of Jesus & Its Truth*, 1921)を趙^{チョンシンイル}信一がハングルで翻訳し、『キリスト教とその眞理』(기독교와 그 진리, 1929)⁸³という題目で発刊した。この本は翌年(1930年)に再版を増刷するほど反響を呼んだ。このように文化統治末期には、卓越した指導力を発揮した賀川の名声は韓国にも広く知られ、このような訳書の出刊にまでつながつた。この書物とともに賀川が書いた『神による新生』(1929)を同じく趙^{チョンシンイル}信一が翻訳し、『新生の宗教』(신생의 종교, 1930)という題目で発行された。⁸⁴この韓国語版は英語版 *New life through God* ⁸⁵よりも1年早く出版された点を見ると、世界的状況よりも韓国における賀川への憧憬とその名声の高さを窺い知ることができる。

⁸³ 賀川豊彦, 『イエスの宗教とその眞理』, 東京: 警醒社, 1921.; 가가와 도요히코, 조신일역, 『기독교와 그 진리』 (*The Religion of Jesus & Its Truth*), 京城: 朝鮮耶蘇教書會, 1929.

⁸⁴ 賀川豊彦, 『神による新生』(特別普及版), 下關: 福音書館, 東京: 教文館(發賣), 1929.; 賀川豊彦, 趙信一譯, 『신생의 종교』, 京城: 朝鮮耶蘇教書會, 1930.

特にキリスト教社会主義者としての賀川に注目された。神戸神学校等日本に留学し、賀川と関わる中で多大な影響を受けて帰国した韓国人牧師は、協同組合運動に携わるなど、キリスト教社会主義の実践的な分野で力を発揮していった。これ以外にも、ファウル・リード(J. Paul Reed)が神戸で英語版として発刊した *Facing our social world* (1929)は、賀川が日本語で前書き(Introduction)を書いたことで、日本人の間でも広く読ませた。翌年には、近江ミッション図書出版販売部から再版され普及していった。この書物も、ラウセンブスイ、賀川などの影響と交流により、社会問題を正面から見つめる福音の解釈を盛り込み、1931年にはハーディなどがハングルで翻訳して『現代社会問題』(현대사회문제)⁸⁶ というタイトルで出刊した。賀川が発行したもう一冊の世界的な英文著書である *New life through God* (原題は *Emancipation through God*, 1931)も、1933年に『解放の宗教』(해방의 종교)⁸⁷ という題目の韓国語版に翻訳されるなど、1920-30年代の日本の出版物の中で賀川の影響は大きかった。

このような時代の流れに沿って、朝鮮基督教書会は、1920-30年代に「社会福音」の提唱者ラウセンブスイの著作を翻訳紹介する。日本ではラウセンブスイ以前の19世紀からすでにキリストの社会訓を強調したセイラー(Shailer Mathews)の著作 *The social teaching of Jesus : an essay in Christian sociology*(1897)やラウセンブスイの *A theology for the social gospel*⁸⁸ を、それぞれ『イエスの社会訓』(1926)⁸⁹、『社会的福音の神学』(1926)というタイトルで翻訳紹介した。日本におけるこのような翻訳成果を参考に、韓国ではラウセンブスイの書物 *Social principles of jesus* を『耶蘇の社会訓』⁹⁰という題目で発行した。イエスの社会原理及び社会理想を「社会訓としての十字架」という概念で説明することによって、結局キリストの福音を

⁸⁵ Kagawa, Toyohiko, *New life through God*, New York, Chicago, Fleming H. Revell Co., 1931.

⁸⁶ J. Paul Reed ; 賀川豊彦序(註釋附), *Facing our social world*, Kobe: Chugai, 1929. ; J. Paul Reed, with an introduction in Japanese by Toyohiko Kagawa and notes in Japanese, *Facing our social world*, 近江八幡町(滋賀県): 近江ミッション図書出版販売部, 1930. ; J. Paul Reed, R. A. Hardie, T.W. Kim 역, 『현대사회문제』, 京城: 朝鮮耶蘇教書會, 1931.

⁸⁷ Toyohiko Kagawa ; translated by Elizabeth Kilburn ; edited and with introduction by Kenneth Saunders., *New life through God*, New York, Chicago[etc.] Fleming H. Revell Co., 1931. (A sequel to ... [the author's] earlier volume, *Emancipation through God*, p. 17.) ; 賀川豊彦, 李泰奎譯, 『解放의 宗教』, 京城: 朝鮮耶蘇教書會, 1933. ; この書物は解放以後、金春培牧師によって再び翻訳出版された。; 金春培編, 『解放의 宗教』(再版), 서울: 聖城學舍, 1949.

⁸⁸ Shailer Mathews, *The social teaching of Jesus : an essay in Christian sociology*, Macmillan, 1897. ; Walter Rauschenbusch, *The social principles of Jesus*, New York: Association Press, 1916. ; W. Rauschenbusch, *A theology for the social gospel*, Macmillan, 1917.

⁸⁹ ウォルター・ラウセンブッシュ, 友井楨譯, 『社會的福音の神學』, 東京: 日本基督教興文協會, 1925. ; セラー・マシューズ, 山本弥一郎訳, 『イエスの社会訓』, 東京: 教文館, 1926.

⁹⁰ 라우에스뿌쉬(Rauschenbusch, Walter), 高永煥譯, 『耶蘇의 社會訓』(Social principles of jesus), 京城: 朝鮮耶蘇教書會, 1930.

社会的に解釈した本である。この本の翻訳も結局は 1920-30 年代における日本のキリスト教界の「社会福音」への関心と無関係ではないだろう。

この頃、李桓信^{イ・ファンシン}はリングル(Walter L. Lingle)の新刊であった *The Bible and social problems* (1929)を『聖書と社会問題』(성경과 사회문제, 1931)⁹¹ というタイトルで翻訳出刊した。この本はこの世に対する神の理想と天国に対するイエスの説教、聖書と金銭、聖書と貧困、聖書と家族、聖書と戦争、教会と社会改革などの内容で、当時流行していた「社会福音」の議論に十分に答えようとした。発行人であるハーディの序文と翻訳を担当した李桓信の「訳者のあとがき」を見ると、当時キリスト教界において最も重要な問題は、「社会及び倫理的教訓を人生に適用し、実践する問題」であると主張している。また李は、いわゆる「読み物、参考図書」が十分でない「貧しい私たちキリスト教界に、一元金となるべくこの本を翻訳した」と述べている。

「最近の最大の要求の一つは、一般のキリスト教信者が、私たちの主が教えた社会及び倫理的教訓を実生活に適用する問題です。なぜならば、それがすなわち世界すべての問題の唯一の解決策になるからです。著者はこの点に対する固い確信を持っています。本書を朝鮮語に訳した李桓信は、元々このような問題に関心を持っていたので、朝鮮キリスト教界に立派な訳書を提供することが出来ました。関心ある誰もがこの本を通して大きな益を受けると信じます。」(Walter L. Lingle, 李桓信訳、「序文」、『聖書とサフェムンディエ』, 1-2.)⁹²

「ある日、学校が終わった後、私は図書室に上がって書籍閲覧に没頭しました。英文欄に目を通すと、目に入った本が *The Bible and social problems* でした。……この宝華を貧しい私たち教界の一元金になれば、という考えが芽生えました。……キリスト者として当然遂行しなければならない義務であり、今日のすべての社会問題解決に確かに大きく役立つ宝石であると信じる理由です。江東本郷にて、李桓信」(Walter L. Lingle, 李桓信訳、「訳者の言葉」、『聖書とサフェムンディエ』, 1-2.)⁹³

その他、救世軍の山室軍平が発行した『労働の宗教的意義』(1923)も朴ウオン Chol の翻訳で『労働と基督教』(노동과 기독교, 1933)⁹⁴ というタイトルで韓国語版が出版され、「労働」問題を神学的に考察した日本での試みを参考にしている。社会問題に大きな関心を見せ、日本で拡大していった「キリスト教

⁹¹ Walter L. Lingle, *The Bible and social problems*, Fleming H. Revell Co., 1929. ; Walter L. Lingle, 李桓信訳, 『성경과 사회문제』, 京城: 朝鮮耶蘇教會, 1931.

⁹² Walter L. Lingle, 李桓信訳, 「서문」, 『성경과 사회문제』, pp.1-2.

⁹³ Walter L. Lingle, 李桓信訳, 「역자의 말」, 『성경과 사회문제』, pp.1-2.

⁹⁴ 山室軍平, 『労働の宗教的意義』(民衆基督教叢書), 東京: 救世軍出版及供給部, 1923. ; 山室軍平, 박원철 譯, 『노동과 기독교』, 경성: 조선예수교서회, 1933.

社会主義」の流れに刺激を受けながらも、同時に 1920 年代から青年たちの間で広まった「社会主義」に対する警戒も表している。すなわち、唯物論に即した宗教の無用論が若者たちの間で台頭し、彼らの問いに直面して、尹致昊の『宗教は果して麻醉剤か?』(1931)、金チュンソンの『宗教は阿片か?』(1931)など社会主義に向けられたキリスト教弁証書が出版されている。⁹⁵

e. キリスト教教育の関連書籍の影響

1920-30年代に韓国のキリスト教教育関連の訳書と著書においても、日本語訳書の重訳による用語使用と概念踏襲の限界がみられる。

最も代表的な訳書である『最近主日学校論』(최근주일학교론、1922)⁹⁶ は、野本稔尋がアドン(Athearn, Walter Scott)の本を日本語に翻訳した『最近日曜学校論』(1919)を重訳したものである。以下の表のように、ハングル版に使われた文章と漢字の単語はすべてが日本の翻訳者である野本稔尋の訳語と一致する。さらにはハングル版の序文は、南宮赫が作成したと記されているが、日本語版を見ると海老名弾正、小崎弘道とともに日本組合教会の代表者三人の中の一人であると評価されている宮川経輝(1857-1936)が書いた序文をそのままハングルに訳したものであることがわかる。言わば、宮川の日本語版序文をそのままハングルにして、末尾の場所と名前だけを「光州、南宮赫」に替えたことで、重訳の次元ではなく盗作文章を序文として載せたことになる。このような現象は、当時韓国のプロテスタント神学界の日本依存をよく示していると言える。

<i>The church school (1914)</i>	
『最近日曜學校論』(1919)	『최근주일학교론』(1922)
“序文：教育は元來知的の教育にしても餘程幼少の時代から打ち込んで置かないと、充分に其發達を見ることは出来ない。そこで眞に教育に志あるものの眼からみれば六歳を以て教育を始めては已の遅いのである。教育は子供が極く幼少の頃から始めなければならないが、人の教育は三代以前から始まるともいはれ、又胎	“ 序文：教育은 본· 지덕(知的) 教育이라 어릴 때부터 너허주지 아니하면 充分히 그 發達을 볼 수가 업나니 教育에 참뜻이 잇는 자의 눈으로 보면 여섯 살부터 教育을 시작하는 것은 너무 느즌 것이다. 그러나 사람의 教育은 三代 이전부터 시작한다고도 하며 · 또는 胎教(배· 안의 교육)도 소홀히 할 수가 업는 것이라고도 하는 터인 고로

⁹⁵ 윤치호(T. H. Yun), 『종교는 과연 마취제인가?』(Is Religion a Soporific), 京城: 朝鮮耶蘇敎書會, 1931. ; 김준성, 『종교는 아편인가?』(Is religion a Opiate), 京城: 朝鮮耶蘇敎書會, 1931.

⁹⁶ Athearn, Walter Scott, *The church school*, Boston ; New York: The Pilgrim press, 1914. ; ワルタル・エス・アッサールン(Athearn, Walter Scott)、野本稔尋訳、『最近日曜學校論』、東京: 警醒社(発売)、1919. ; W. A. Athearn、한석원訳、『최근주일학교론』、경성: 주일학교협성회、1922.

<p>内の教育も忽にすることは出来ないといはれる位であるから、普通に教育と云ふことになれば呱呱の聲を擧げた其の瞬間から始められなければならない。(略)大阪城南玉造の矯居にて、宮川經輝誌) (pp.5-8.)</p>	<p>보통으로 教育이라 하면 울음소리가 떠러질 그 때부터 시작하여야 하는 것이니라. (중략) 광주(光州) 양림(楊林)에서 조선주일학교연합회장(朝鮮主日學校聯合會長) 남궁혁(南宮赫) 씀” (p.2.)</p>
<p>教會學校の職分・教會學校の職分は第一に地上に於ける神の國の擴張の爲に聖別せられたる聰明にして且有力なる基督者の生活を發展せしむるにあり。第二には教會のすべての事業のために有力なる指導者を養成せんことである。(p.1)</p>	<p>教會學校의 職分: 教會學校의 職分은 첫째로 이 세상에서 하나님의 나라를 확장(擴張)하기 위하여 聰明하고도 有力한 그리스도 신자의 生活を 발던(發展)케 함에 잇스며, 둘째로는 教會의 모든 事業을 위하여 有力한 지도자(指導者)를 양성(養成)함에 잇느니라. (p.1.)</p>

『최근주일학교론』(最近主日学校論)と同年に発行された『主日学校幼稚科教案』(1922)、『夏季兒童聖經学校教案』(1927) など⁹⁷ も、その頃日本で発行された『標準日曜学校教案』や『日曜学校科別教案』など⁹⁸を参考にしたように見える。超教派で構成された「日本日曜学校協会」では「幼稚科」、「初等科」、「中等科」、「高等科」など四つの段階に区分して日曜学校の教案を活発に発刊している。⁹⁹韓錫源は、『(音譜附脚本)少年少女歌劇集』(1923)¹⁰⁰をも発刊したが、このような試みは岡山や兵庫の宝塚にある独特な「少年少女歌劇団」の文化に大きく影響を受けたように考えられる。¹⁰¹

⁹⁷ 韓錫源編、『主日學教幼稚科教案』(第1年)、京城:새동무社、1922. ; 韓錫源、朴弘根共編、『教主誕日祝賀會順序』、京城:南監理教會朝鮮每年會主日學校部、1922. ; 許瑪利亞、韓錫源共編、『夏季兒童 聖經學校教案』、京城:朝鮮耶蘇教書會、1927.

⁹⁸ 『標準日曜学校教案』(福音社); 『日曜學校科別教案』(日曜世界社)

⁹⁹ 日本日曜學校協會文學委員編、『愛の神と其よき子供』(幼稚科教案)、東京:日本日曜學校協會出版部、1925. ; 日本日曜學校協會文學委員編、『舊約建國物語』(中等科教案)、東京:日本日曜學校協會出版部、1925. ; 日本日曜學校協會文學委員編、『イエス傳』(高等科教案)、東京:日本日曜學校協會出版部、1925. ; 日本日曜學校協會文學委員編、『優しき神と其善き世界』(幼稚科教案)、東京:日本日曜學校協會出版部、1926. ; 日本日曜學校協會文學委員編、『神の子供の生活』(初等科教案)、東京:日本日曜學校協會出版部、1926. ; 日本日曜學校協會文學委員編、『使徒時代』(高等科教案)、東京:日本日曜學校協會、1926.

¹⁰⁰ 韓錫源編、『(音譜附脚本)少年少女歌劇集』(第1輯)、京城:永昌書館、1923. ; 韓錫源編、『(音譜附脚本)少年少女歌劇集』(第2輯)、京城:永昌書館、1924.

¹⁰¹ 山室軍平とともに「岡山四聖人」として評価されている石井十次が設立した岡山孤兒院に、1898年から少年少女音楽隊が運営され始めたのがきっかけになり、この楽隊の全国ツアーが行われた中で「歌劇」概念が融合され、「少年少女歌劇」という公演形式が誕生した。1910年代に入ってから是有名な「宝塚少女歌劇」と受け継がれていった。(山本美紀,「岡山孤兒院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教 Band-文化の萌芽をめぐって」、『アジア・キリスト教・多元性』(第13号)、京都:現代キリスト教思想研究会、2015年3月、p.106.参照。)

1930年代に入っても主日学校運営と教授法を教師たちに涵養するための参照図書の製作において、日本側の出版物を積極的に参考している。『主日学校組織と管理』(1932)¹⁰²とともに『主日学校教授原則』(1935)を発行した金俊玉は、その本の序文で教師養成のための専門書籍不在の現実的な限界を慨嘆しながら、この本の編纂のために英文及び日文書籍を積極的に参考し、活用したと明らかにした。

主日学校指導者講習会のような時に、講師が苦心する姿を見ると、本当に痛ましくて見てられない。彼らはこんな本、あんな本を見ては仕方なしに日本の書物を探して、結局、ふーっとため息をついて、なんでも選んで教えながら大きな不満を吐露する。著者もそういう経験を何回かして、奮発しながら唐突に「私が一冊作らなくては」と朝鮮語、日本語、英語などの本をあれこれあさってみては、設計して、一覧表を作って、実際に何回か試験も試みて、また何人かの講師に委託して実験するようにして見た結果、成績が良好であった。それで、それらを基準として、各書物から材料を収集し、著者の意見を追加させて作ったのがこの本である。¹⁰³

メソヂスト教会のもう一人のキリスト教教育専門家であった裴徳榮牧師は、金俊玉牧師が3年前(1932)に発行した『主日学校組織と管理』とまったく同じタイトルの本『主日学校組織と管理』(1935)¹⁰⁴を新たに出版する。裴徳榮もこの本の序文で次のように多くの先輩の先行研究成果を積極的に参考にしたことを明らかにしながら、海老沢と岩村清四郎など二人の日本人の著作を紹介している。

本書は著者が読んだ先輩たちの文献を模本として、私たち教会主日学校で経験したことを緯(種)にして編成された。その中でも特に参考にした図書は次の通り。

- 金俊玉、『主日学校 組織と 管理』
- 海老沢、『宗教教育管理法』
- 岩村清四郎、『日曜学校の組織管理』
- Hurlbut, “*Organizing and Building up the Sunday School*”
- Schisler, “*The Educational Work of the Small Church*”
- King, “*Christian Education in the Local Church*”

¹⁰² 金俊玉、『主日學校 組織と 管理』、京城：基督教朝鮮監理會總理院教育局、1932。

¹⁰³ 金俊玉、『主日學校教授原則』(4版)、京城：基督教朝鮮監理會總理院教育局、1935。

¹⁰⁴ 裴徳榮、『主日學校 組織と 管理』、京城：基督教朝鮮監理會總理院教育局、1935。

- Barclay, “*Organization and Administration of the Adult Department*”¹⁰⁵

裨徳榮は、『主日学校青年事業指針』(1938)の序文でもメソヂスト青年会(The Epworth League)教育の運営実態を報告しながら「アメリカ・メソヂスト教会の青年事業と、日本メソヂスト教会の青年事業を斟酌して、我が教会で青年事業をする時に適切な組織と管理と行事を制定しようと最善をつくした」¹⁰⁶ と、直接的関係を結んでいる米国の教会の事業実態のみならず、日本メソヂスト教会の状況も積極的に参考にして教育組織管理と各種行事を開催したことを示した。このような点は、教会教育事業に必要な各種書籍の出版においても日本ですでに多量印刷され普及されている「宗教教育」の関連書籍を積極的に参考にして韓国教会現場に適用する流れにつながったことを確認させてくれる。

おわりに

韓国のキリスト教出版は、日・中・韓三国の中で最も遅れている一面をみせた。したがって、初期には近代出版及びキリスト教書籍の導入の歴史が最も早く、長かった中国の成果物を主に参考とし、最大の影響を受けた。しかし、宣教師のハングル書籍出版政策が定着し、大衆もキリスト教漢籍よりはハングル書籍に対する需要が増加しながら漢籍の影響力は徐々に減少していった。結局、1910年の韓国併合によって朝鮮半島が日本の植民地に転落し、一般政治、経済、社会、文化の領域のみならず、キリスト教を含む宗教界も日本の近代化に影響を受けるようになった。

朝鮮基督教書会は宣教師が主導して設立され、長年の間韓国人キリスト者リーダーは宣教師の補助的な位置に留まるという限界があり、宣教師が英文書籍を自由に選択してハングルに翻訳、紹介する傾向があった。しかし、植民地という特殊な状況の中で近代日本の多様な訳書と著述が朝鮮半島に流入することで、韓国の出版市場で日本の影響力は増大していった。宣教初期の中国で広く読まれ検証された書籍をハングルに翻訳、紹介するという傾向を脱して、ますます日本で出版された書籍を翻訳、紹介する事例が増加することになったのだ。特に、日本で出刊されて反響を起こしたり、普及率において検証された諸本、著名な日本人キリスト教指導者の著述などを紹介する傾向が目立っていった。おのずと植民地期を経て中国のキリスト教出版界の影響力は朝鮮半島で徐々に弱化していく。結局、東アジアでのプロテスタント宣教初期における「欧米 → 中国 → 日本 → 韓国」という近代キリスト教出版界の影響構造は、「欧米 + 日本 → 韓国」という図式に徐々に変わって行ったことがわかる。しかし、1945年の解放以後、韓国のキリスト教出版は、「欧米

¹⁰⁵ 裨徳榮、『主日学校 組織と管理』、2。

¹⁰⁶ 裨徳榮、主日学校部編纂、「序」、『主日学校青年事業指針』京城：基督教朝鮮監理會總理院教育局、1938、1。

→ 韓国」という直接的で能動的な構造に再編されながら、主体的な韓国のキリスト教出版の力量確保をはかる方向に転換されていった。

このような韓国プロテスタント教会における出版の構図の変化を見て、日本による朝鮮統治が役立ったという、いわゆる「植民地近代化論」を合理化する根拠として活用する可能性があるだろう。しかし、このような歴史的事実は、むしろ当時の韓国プロテスタント教会における出版が、朝鮮総督府当局の厳しい検閲と禁圧政策、また教会内部には宣教師の神学的規制と出版検閲という二重の統制下で主体的な神学受容及び自己神学化がどれほど制限され、統制を受けたのかを確認させる重要な事例になる。日本政府からの出版禁圧政策と来韓宣教師の神学的検閲という「二重の統制構造」は、韓国のキリスト者がより成熟した神学議論を形成し、西欧神学を主体的に自ら神学化させるまでに至らせる機会を植民地下では剥奪されて来たことを示している。このような日本政府と欧米宣教師による二重の出版統制の弊害は、韓国プロテスタント教会の出版が、1945年解放以後になって、ようやく「欧米 → 韓国」という直接的で能動的な神学受容と創出を行うことで明らかになる。すなわち、解放以後、韓国キリスト教出版界は神学受容への主体性と力量を確保し、いわゆる「韓国の神学」を模索する方向に転換して行くことによって、植民地時代に「日本と欧米」(朝鮮総督府と宣教師)から受けてきた統制から脱却することができるようになった。

<植民地時代における日本キリスト教書物の影響>

英文書籍	日本語書籍/翻訳書	韓国語書籍/翻訳書
	『予が改宗の顛末：佛門を出でゝ基督者となりし理由』(1914)	『予의 改宗의 顛末』(1921)
	『信仰のすゝめ』(1916)	『그리스도교의 신앙』(1922)
The imitation of Christ	『基督の模倣』(1910)	『기독교성법』(1922)
The church school(1914)	『最近日曜學校論』(1919)	『최근주일학교론』(1922)
	『パウロの人物と信仰』(1917)	『바울과 그의 신앙』(1923)
Thirty studies about Jesus(1917)	『イエス研究』(1922)	『예수생활의 연구』(1926)
Four portraits of the lord jesus Christ	『基督之四肖像』(1912)	『그리스도의 四肖像』(1927)

19-20 世紀東アジアにおけるキリスト教出版の諸関係と動向

(1905)		
Ten studies in the Sermon on the Mount(1926)	『山上の教訓』(1898) 『山上の垂訓に関する研究』(1920) 『キリスト山上の垂訓』(1928)	『산상보훈연구』(1929)
<i>Imago Christi : The example of Jesus Christ</i> (1889)	『基督のすがた』(1891)	『그리스도 모범』(1929)
	『イエスの宗教とその眞理』(1921)	『기독교와 그 진리』 (1929초판/1930재판)
The Christ of the Indian road (1925)	『印度途上の基督』(1929)	『印度途上の 그리스도』(1930)
<i>The social teaching of Jesus : an essay in Christian sociology</i> (1897) <i>The social principles of Jesus</i> (1916) <i>A theology for the social gospel</i> (1917)	『社會的福音の神學』(1925) 『イエスの社会訓』(1926)	『耶蘇의 社會訓』 (<i>Social principles of Jesus</i> , 1930)
	『神による新生』(1929)	『新生の 宗教』(1930)
<i>The fact of Christ : a series of lectures</i> (1900)	『基督の事實』(1916)	『그리스도의 事實』(1930)
<i>Facing our social world</i> (1929)	<i>Facing our social world</i> (1930)	『현대사회문제』(1931)
<i>New life through God</i> (1931)	<i>New life through God</i> (1931)	『解放의 宗教』(이규태, 1933); 『解放의 宗教』(김춘배, 1949)
	『労働の宗教的意義』(1923)	『노동과 기독교』(1933)
	『人生の旅行』(1923)	『인생의 여행』(1935)
The life of Our Lord : written expressly for his children(1934)	『主イエス様の御生涯』(1934)	『주님의 일생』(1934)

アジア・キリスト教・多元性

	『イエスさまの御一生』(1934)	
	宮川巳作, 『聖書の話』, 東京: 岩波書店, 1917.	『聖經의 由來』 (1929)

(ホン・スンピョ 「信仰と知性社」編集主幹、韓国キリスト教歴史文化アカデミー研究員)

(翻訳：神山美奈子・洪伊杓)